

第1回 パラスポーツの振興と
バリアフリー推進に向けた懇談会

—議事録—

日時：令和3年12月16日(木) 11時00分～11時55分

場所：東京都庁第一本庁舎7階大会議室

【横山次長】

本日はご多忙のところ、当懇談会にご出席を賜りまして誠にありがとうございます。

懇談会の意見交換に入るまでの間、進行役を務めさせていただきます東京都政策企画局次長の横山と申します。どうぞよろしくお願い申し上げます。

開会に先立ちまして本日の進行について事務局からご説明を申し上げます。

<事務局>

事務局からご説明いたします。

本日の会議は、新型コロナウイルス感染症対策として、こちらの会議室とオンラインでの出席を合わせたハイブリッドによる開催とさせていただきます。

オンライン参加の皆様におかれましては、ご発言のとき以外は音声モードをミュートにさせていただきますようお願いいたします。また、こちらの会議室でご参加の皆様におかれましては、ご発言いただく際は、お手元のマイクのスイッチを押してからお話しください。お話が終わりましたら、再度スイッチを押させていただきますよう、よろしくお願いいたします。

次に、懇談会の公開につきましてお知らせいたします。本日の懇談会の様子は、都のホームページ上で、インターネット中継により配信されております。また、議事録につきましては、後日、ホームページ上に公開してまいります。

続きまして、本日の出席者のご紹介です。座席表を持って代えさせていただきます。

次に、フォトセッションについてのお願いでございます。懇談会の後、別室にて、フォトセッションを行います。事務局からお声がけをいたしますので、まず、報道機関の皆様からホールへ移動をお願いいたします。メンバーの皆様は、この場でしばらくお待ちいただき、準備が整いましたらお声がけをさせていただきますので、ご移動をお願いいたします。オンラインにてご参加の皆様におかれましては、モニター画面上でフォトセッションにご参加いただきます。事務局からお声掛けするまで、接続を切らずにそのままお待ち願います。

最後になりますが、お手元に新しい名刺をお配りしました。これまでご使用いただいているソメイティの入った名刺は、本年12月31日までご使用いただけるのですが、本日以降は新しい名刺をご使用いただければと思います。

また、「未来へつなぐ TOKYO2020 の記憶」と題した小冊子と、東京2020大会のレガシーをあしらったカレンダー、今週日曜日に開催します参加体験型のパラスポーツイベント「チャレスポ! TOKYO」のご案内、昨日公開しました東京パラスポーツ人材バンクのご案内をお配りしております。リモート参加の皆様には、後日送付いたしますので、ぜひご活用ください。以上です。

【横山次長】

説明事項は以上でございます。

それでは定刻になりましたので、第1回「パラスポーツの振興とバリアフリー推進に向けた懇談会」を開会いたします。

開会に当たりまして座長の小池知事よりご挨拶を申し上げます。知事、よろしくお願いたします。

【小池知事】

皆さんおはようございます。

12月も今日は半ば過ぎて、もうあとわずかになりました。ご多忙のところ今日集まりいただきまして、誠にありがとうございます。ちょっと髪型変わったんだ？

(市川様「あ、そうなんですよ」)

本当にありがとうございます。

さあ、今年のハイライトは何といても東京2020大会でございます。お陰様で皆様方のご協力によって開催することもでき、また特にパラ応援大使の皆様方には、パラスポーツを盛り上げてくださいました。そして、魅力の発信を世界津々浦々にお伝えいただいた、多大なご協力いただきましたことに改めて心からの感謝を申し上げます。ありがとうございます。

そこで、大会に関わってくださった皆様方、全ての方々に感謝の気持ちをお伝えする動画を作成いたしました。覚えていらっしゃいますか？パラリンピックでこの片翼の少女が出てくるシーンがありましたよね、和合由依さんという13歳の、可愛い素敵な女性ですけれども、ご出演いただいた、そういう動画をちょっと作ってみましたので、こちらの方をご覧いただければと思います。

(「ARIGATO 動画」放映)

【小池知事】

和合由依さん。本当にもう純粹に、このパラを、そしてまた障害のある人もない人も一緒にやっていきたいと思います、そういうメッセージが体から伝わったかと思えます。

それから皆様方のお手元には、こちら「未来へつなぐ TOKYO2020 の記憶」という小冊子をお配りしております。大会が私達にもたらしてくれたことを振り返って、そして、それを未来へとつないでいこうという趣旨でまとめたものでございます。パラスポーツについては、こちら、ちょうど付箋のついたところがまとめになっていますので、ご覧いただければと思います。

自らの限界を超えて挑戦するパラアスリートのその姿が、世界中の人に勇気、希望をお届けしました。そしてその一人ひとりの違いこそが多いなる輝きを生み出し

て、どんな困難も乗り越える力となるんだということを、私達に示してくれたと思っております。

さあこの思い、感動をパラリンピックの思い出として終わらせるっていうのではなくて、むしろここをスタートラインにしていきたいと、この輪を引き続き大きくしていきたい、そういう思いでいっぱいでございます。

今日、このようにお集まりいただいたわけですがけれども、今日から、名前を新たにしましてこの懇談会の再スタートにいたしたいと思っております。「東京大会、パラリンピックが終わったからじゃない。これからがスタートだ」という趣旨で、パラスポーツとバリアフリーにさらに光を当ててまいりたい、社会に根付かせていくということで皆様方の様々な工夫、ご意見等々と伺わせていただければと思っておりますので、どうぞそれを東京都として活かしていきたいと考えております。どうぞよろしくお願いいたします。

私から、冒頭ご挨拶させていただきました。本当に皆さんありがとうございました。

【横山次長】

ありがとうございました。

続きまして、名誉顧問の谷垣禎一様からメッセージを頂戴しております。前方のモニターをご覧くださいと思います。

(名誉顧問メッセージ動画放映)

皆様こんにちは、谷垣禎一です。

東京 2020 パラリンピックは、多くの困難を乗り越えて開催されたものだったと思います。

その中で、アスリートが世界中の人々に感動と共に「自分たちもできるんだ」と、こういうメッセージを届けてくれたと、私は思っております。私自身、リハビリに務める毎日ですが、大きな勇気を与えてもらいました。

この東京大会のあと、一番大事なことは「誰もがスポーツができる、参加できる」そういう社会を作っていくということではないかと思っております。

そういう中で、パラスポーツを振興し、そしてバリアフリー社会を実現していくために、この懇談会がスタートをしたわけですが、そういう誰もが仲間と集い、障害の有無に関わらず、スポーツを楽しむ環境を作れてこそ「パラリンピックを実際にやったんだなあ」という実感が得られるのではないかと思っております。

私は懇談会の皆様と一緒に、そういう社会を創るために歩んでまいりたいと考えております。どうぞよろしくお願いを申し上げます。

【横山次長】

続きまして、懇談会の意見交換に移ります。

なお、ご発言の際はお手元のマイクのスイッチを押してからお話をいただきますようお願いいたします。お話が終わりましたら再度スイッチを押してマイクを切ってくださいようによりしくお願いいたします。

それでは、ここからの進行は知事をお願いいたします。

【小池知事】

はい、今度は司会役に変わりますので、よろしくお願いいたします。

今、谷垣さんからこのような形でメッセージを寄せていただきました。谷垣先生自身も、今もリハビリ中で、先日ちょっと歩く練習もされているということです。きっとパラリンピックを通じていろんなエネルギーを、谷垣先生自身も得られたのではないかと思います。

さあ、そして今日は、皆様方からもご意見をいただいて、より誰にでも住みやすい東京づくりの方に進めていきたいと思っておりますけれども、大会への出場を通じて得られた経験や感想からまず伺わせていただきたいと思います。

今年の2020パラリンピック大会、振り返ってみますと、無観客とか、何よりも1年延期したわけですね。アスリートの皆さんはもうこの何月何日の最初のこの大会、試合に体調どう合わせるかっていうのを全部逆算して準備しておられたのが、それが1年延期ということと、「そもそも開けるのかしら」という不安、そういった中での大会へのご出演、ご参加だったと思っておりますし、素晴らしい成果を収めていただいて、これまでもいろんなパラリンピックに参加されたご経験のある方々もお越しいただいておりますので、今日はそういった皆様からのお話を伺いたいと思っています。

それでは、最初、選手村の副村長を務められた根木さんから聞いていきましょうかね。はい、大会を通じて思いや感想など、どうぞ、お願いします。

【根木 慎志様】

はい、わかりました。トップバッターになるとは思っていなかったもので、すいません。パラ応援大使をさせていただいております、車いすバスケットボールをやっていた根木です。大会期間中は、今、都知事からいただいた通り選手村の副村長という役割と、見ていただいた方もおられるかもしれんけど、スタジオの方で解説とかさせていただいていました。

本当に伝えたいこといっぱいあるんですけど、今日は時間が限られているので、選手村の話をもっとさせていただくと、選手村は、世界中から、アスリートがその大会に向けて、その場所で皆さんがくつろぎ、時には集中する場所なんです。僕が一番感じたのが「これぞパラリンピックだな」という場所だと思います。全国から全世界から160を超える国の中で、パラリンピックの場合だったら4000人以上の人はいるんです。そこにはまさしく障害も様々だし、国も様々、いろんな文化の違いがある中で、スポーツというものを通じて、本当に一つになれるっていう。違いをま

さしく認めながら、誰もが輝く社会っていうのが選手村の中で見ました。

今日、ここには高桑さんであったりとか、リモートの三浦さん、アスリートたちが実際に素晴らしい競技をすることによって、人間の可能性であったりとか、誰もがやっぱり輝ける存在であるっていうことをアスリートが自ら示していったのかなというふうに思っています。

あともう一つ、すいません長すぎますね。付け加えると、世界中のアスリートの皆さんからコメントいっぱいいただきました。この大変な中で、よくこの大会を開いてもらった、さすが日本、東京はすごいということをおっしゃられたことと、多くのボランティアの皆さんの笑顔から、勇気、元気をもらえてリラックスし、時には集中して大会ができたので、ぜひとも皆さんに、その感謝の気持ちを伝えてほしいということを副村長として言われました。この場を借りてそのコメントもさせていただきます。以上です。

【小池知事】

ありがとうございます。

それではロンドン・リオ大会にも陸上で出場されました、高桑さんお願いします。

【高桑 早生様】

今回の東京大会のパラの陸上競技で出場しました高桑早生です。本日はよろしくお願いします。

私はアスリートとして実際にパラリンピックに参加させていただきまして、今、根木さんからお話があった選手村で実際に生活していましたし、新しくできました国立競技場でも走り幅跳びと100メートルで出場させていただきました。

環境面に関しましては正直、東京で生活している身ですので非常に不思議な感覚といえますか、今回は感染症対策しっかりされていましたので、非常に隔離された世界で、毎日生活して移動してっていう形だったのですが、生活に関しても、移動に関しても、多くの方がスムーズに行えたのでは、というふうに思います。バスが、渋滞に巻き込まれるとかいうこともそんなに頻繁に起きたことではなかったのかなと思いますし、スムーズに会場への移動もできていました。

確かに無観客になってしまって非常に寂しい会場ではあったのですが、私の感想としましては、パラリンピックをテレビで見てもらおうという経験を、今回、日本国民の多くの方にさせていただいたというのは、財産なんじゃないかなと感じています。

というのも、これまでパラリンピックをテレビで見る機会は、他のオリンピックであったり、いろいろなスポーツであればテレビで見る機会ってたくさんあると思うのですが、パラリンピックをテレビにつけたらやっている、というような状況は、これまでなかったかなと、私もキャリアを通して思うことでした。例えば、車いす

バスケの決勝の試合なんか、たくさんの人と一緒にリアルタイムで観戦できたというのは、無観客ならではと行ってしまうと大変残念ではあるのですが、多くのテレビで放送してもらえたというのは、パラアスリートにとってはいい経験だったのではないかなと思います。

これからパラスポーツというものがそれに見合ったというか、多くの人に見てもらえて本当に感動してもらえる、すごく魅力的だなと思ってもらえるスポーツに、この東京大会をきっかけになっていってもらえたらいいなという思いが、実際に出場してみて感じたことです。私も他に話したいことたくさんあるのですが、以上にさせていただきます。

【小池知事】

ありがとうございます。

それでは続いて今日はですね、リモートでも参加していただいている皆さん、たくさんいらっしゃいます。まずパワーリフティングの三浦さん、お願いいたします。

【三浦 浩様】

はい、パワーリフティング三浦です。3点ほど。

まず、参加選手、過去最多で、本当に世界の選手が東京オリパラを待ち望み、参加できたこと、また僕ら選手も、やっぱり東京に来られたこと、すごく喜んでいました。

それからボランティアの皆さんが、陰ながらすごく応援してくれたというか、もう声掛けしてくれたりとか、皆さんのおかげで本当に開催できたってことは僕らも選手としてもやっぱり喜んでいきます。

あともう一つは、個人的ですけども、小池知事から選手村に手紙をもらったり、パラ応援大使の仲間の大黒摩季さんからビデオレターをもらったり、何かそういうところで自分が今、すごいステージに立っているのだなという部分で、選手としては、実感ができたってということと、開催できたからこそ、こういう気持ちになれたってということで、本当にすごく、開催できて参加できたことは僕としてはもう感謝しかありません。以上です。

【小池知事】

はい、ありがとうございました。写真の方もでていきます。とても雰囲気伝わってきている、そんな写真です。

そして続いてはですね。村岡桃佳選手にお願いしたいと思いますけど、まさに、冬季パラリンピック、北京に向けての海外遠征中ということで、メッセージいただいているので、ご覧いただきましょう。

(村岡 桃佳様メッセージ動画放映)

パラ応援大使の村岡桃佳です。東京 2020 パラリンピックでは陸上競技で出場させていただきました。

今回は、無観客での開催というような状況でしたが、現地のスタッフの方やボランティアの方々がたくさんの応援をしてくれて、とても力になりました。

また、SNS 等を通じてメッセージをたくさんいただいてとても嬉しかったです。

今までは、なんとなくパラリンピックを知っているというような方々が多かった認識でしたが、今回のこの東京パラリンピックを通じてパラリンピックの競技として、より深く知ってくださったり、また選手それぞれのことを応援してくださる方が増えたなと感じています。

今後、そのように興味を持ってもらえたら嬉しいなと思いますし、私たち選手の方からも、もっと発信等、続けていきたいです。

【小池知事】

村岡桃佳選手でした。頑張っていてほしいですね、北京大会。

さあそれではですね、今は実際に東京のパラリンピックに携わって出場されて、素晴らしい成績を残された、記録も残された皆さんのお話、そして村岡さんは、これから挑戦をするということでした。

2つ目の議題に移りたいと思います。事前に、大使の皆さんにご回答いただいたアンケートがありますので、事務局の方から、報告してもらいましょう。よろしくお願いします。

<事務局>

はい、それでは事務局から報告いたします。

今回、3点のアンケートにご協力をいただきました。「パラ応援大使の活動で印象に残ったこと」、「東京 2020 大会で印象に残ったシーン」、「後世に残したい 2020 大会のレガシー」のアンケート結果につきましては、お手元の小さい方のタブレットをご覧ください。リモート参加の皆様には事前にメールで送信しております。

3点目の「後世に残したい 2020 大会のレガシー」につきまして、前方のモニターに概要をまとめました。

パラスポーツやバリアフリーへの興味・認識の深まり、パラスポーツを楽しむ環境整備、可能性に挑戦する機会創出、共生社会の担い手と意識する心、施設・精神両面でのバリアフリー推進など、様々なご意見をいただいております。報告は以上です。

【小池知事】

どうやってパラスポーツを振興していくのか、そして、それをどうやってバリアフリーのまちづくりや共生社会に結び付けていくかということでアンケートをいた

いただきました。ありがとうございます。

それでは、これらを踏まえて東京 2020 パラリンピックのレガシーをどうやって活かしていくのかなど話を伺わせていただければと思います。

開会式でのジャズピアノとのフュージョン素晴らしかったです。それでは早速、海老蔵さんからお願いいたします。

【市川 海老蔵様】

皆様こんにちは、市川海老蔵です。

私がパラリンピックで感じたことは、本当に自分がいかに無知だったかなということと、また、都知事と昔、バリアフリーのことで有楽町駅や鍛冶屋橋通りを視察させていただいたこともありましたが、やはり、心の方のバリアフリーが全然足りていなかったことを痛感しました。

オリンピックとパラリンピック選手の方々の、情熱の持ちどころは同じなので、どちらも大変感動はするのですが、自分たちに直接与えてくれる感動が少し違うように感じました。

このバリアフリーの会議を都知事ともさせていただいている中で感じたことは、バリアフリーを進めることはとっても大事だなと感じましたが、バリアフリーだけをやるより（ハードの部分より）も、どちらかという皆さんが不自由で使っている部分のところを、もっとアップデートしていくことの方を見つめ直す機会なのかなと感じました。有楽町なり、バリアフリーをしていったところの、しなくても良い部分が見えてくるのではないかと。例えば、有楽町をバリアフリー化したところで有楽町駅以外のところはそれが出来なかったら、やはり駄目かなと。車椅子が、例えば、階段を上げられるような機能とか段差も難なく超えられるような機能があったときに、それを東京都が支援してできていた場合、その方は有楽町駅でもなく、例えば京都駅、大阪駅、もちろん地方でも世界でも、どこでもそれが使える環境に、見方をちょっと変えるべきではないのかということ、今回、大会を見ながら感じました。

私一人では何もできませんが、こういう場で発言をさせていただけることで、そうかもしれないと共感いただけることがあったならば幸いです。とにかく感動をありがとうございました。

【小池知事】

ありがとうございました。ハードは、まちづくりの一環として東京都が行いますけれど、それをどう活かしていくかというのは、都民の皆さんのご協力あってのことです。そういう意味でも本当に貴重なご意見ありがとうございます。

次にヨーコ・ゼッターランドさんをお願いいたします。

【ヨーコ・ゼッターランド様】

ありがとうございます。今回パラ応援大使を務めさせていただきました、ヨー

コ・ゼッターランドです。よろしくお願いいたします。

今回、私は、他の競技団体の理事等も勤めているということもありまして、大会の会場で視察を行ったり、またプレゼンターとして大会の方に参加させていただきました。これまで、私自身オリンピックとしてオリンピックに出場したことはあるんですけども、これだけじっくりパラリンピックを見る、パラアスリートの皆さんの活躍を見るっていうのはこれまで一度もなかったもので、その機会が本当にいただけたということは、私自身も多くのことを学びましたし、また考えさせられること、今後どうしていかなきゃいけないのかということ、いろいろと考えさせられた大会でした。

そして、これを日本、そして東京で開催できて、多くの皆様のご尽力によって、大会が開催できたということは、多くの皆様に見ていただくその機会もありましたので、それを本当に嬉しく思っています。

大会の会場で感じたことというのは、私自身が先ほど「心のバリアフリー」、どういうふうに自分の心の目を持つかということを考えながら見ていたんですけども、1人の人、人間、その人の個性ということを見たときに、非常に一人ひとりがユニークでその存在が大変に尊いものであるということ、競技を見て競技を通じて感じるところがたくさんありました。

多くの皆さんに興味関心を持っていただけたということは、その熱を冷まさせない、それを継続していける。ハード面もそうだと思うんですけども、そのハードをやっぱり活用して、その体制作りというものを継続して、その競技、あるいはそういう方たちと触れ合い続けていただけるような、そういう環境を作っていけたらというふうに思っております。本当にありがとうございました。

【小池知事】

プレゼンターを務めていただくなど、本当にご協力ありがとうございました。
続いて高橋先生、よろしくお願いいたします。

【高橋 儀平様】

パラ大使を務めさせていただきました東洋大学の高橋です。どうもありがとうございました。

私は、これまでハード側で東京都の福祉のまちづくりに関わってきたんですけども、今回、まずお礼を申し上げたいのは、やはり東京オリンピック・パラリンピック準備局の皆さんと一緒に当事者参加の施設整備に関わらせていただいたことです。これはこれまで東京都の様々な会議で申し上げてきたことなわけですけれども、どちらかと言うと、当事者の方々が施設づくりに本格的に関わられたのは初めてかもしれない。

本格的に実現した今回の取り組みは、これからのレガシー展開に向けてとても大事です。やっぱりみんなと一緒に作り上げていく、あるいは作れる、ということが

今回の準備の段階で、競技場等の準備の段階で十分わかったのではないかなので、今までは「できない」というところを見てきたのですが、そうではなくて、できる、そしてそのことによって変わることが明確になってきたわけですね。

それと同時に変わっていく決断をしていく、変わっていかなくちゃいけないんだということが、これからの共生社会のまちづくりにとても重要だということを改めて確認をさせていただきました。本当にありがとうございました。

【小池知事】

はい、まさに街としてのレガシーが残ったと思います。これを活用していくということで御指摘いただきありがとうございます。

それではですね、私、CD 持ってますよ、Little Glee Monster のみなさん。今日はですね。4 人お揃いでお越しいただきました。それではどなたかご発言いただきましょうか、かれんさん。

【Little Glee Monster /かれん様】

はい、パラ応援大使を務めさせていただきました、Little Glee Monster のかれんです。

今回のオリンピック・パラリンピックは、やっぱり新型コロナウイルスの感染の状況下ということで、1 年延期という形ではあったと思うのですが、本当にいろんな方がプラス 1 という、ポジティブな前向きな発想で取り組んでいらっしやっしたのは、本当に素晴らしいことだなというふうに感じました。

あとはやっぱり、今回、皆さんいろんな強い思いを持って、日本の皆さんも観戦をされていたと思いますし、より今後も、もっともっとスポーツを通して、国だったり、地域が活性化すればいいなというふうに改めて感じました。以上です。

【小池知事】

もうお一方、MAYU さん。

【Little Glee Monster /MAYU 様】

同じく Little Glee Monster の MAYU です。

そうですね、まずは東京でオリンピック・パラリンピックが開催できたことが、何よりも嬉しく思いました。そして、その中でボッチャなどは、より多くの方に知っていただいたのかなというふうに思います。

そして、パラリンピックを通して、もっと多様性が広がり、一人ひとりの皆さんがもっともっと自由な気持ちを持って過ごせるような世界になればいいな、というふうに思います。はい、以上です。

【小池知事】

はい、ボッチャは本当にね、『スギムライジング』っていうのが流行語大賞の一つになったりね、本当に身近になりましたし、誰でもできますのでね。ぜひ Little Glee Monster の皆さんもコンサートの合間のトークの時にでもぜひ、このことなどおっしゃっていただければと思います。

それでは続いて、ラモスさんお願いします。

【ラモス 瑠偉様】

皆さんこんにちは、ラモスです。

今回のパラ大使としてやらせていただいたことが、すごく光栄に思っております。残念なのは、多分、ここにいらっしゃる皆さんも同じ気持ちだと思いますが、もっと選手の皆さんの力になりたかった。そのことができなかったのは、残念でたまりません。私は、何かの形でもっと応援したかったな。

さっき、かれんさんも話していましたが、終わってから、いろんな記者や選手と話したら、『日本だからこそできました。他の国だったら絶対できていません。』とみんなが言ってくれて嬉しかった。なによりも、日本人としても誇りを持っております。

私は、選手たちが世界中に与えてくれた感動、勇気、希望に、最初から最後まで感動しました。これから私達が、選手たちに恩返しできることは何かと考えると、そのパラスポーツがもっと広めていくことじゃないかなと思いました。私達が、その火を消さないようにやっていく義務あるんじゃないかなと思っています。

私もできることがありましたら、心からサポートさせていただきたいと思えます。ちょっとだけでも、皆さんの力になればどんな幸せだろうな、と私は思っています。今日は、ありがとうございました。

【小池知事】

こちらこそ、ありがとうございました。ラモスさんの思いがこれからも選手を応援し、また自分もいろんな体に障害があっても、いろんなスポーツできるんだぞっていう、また子供たちにもですね、勇気を与えてくれると思います。

テリーさん、今日も新しいメガネでありがとうございます。

【テリー 伊藤様】

知事、そして関係者の皆さん、パラスポーツ開催、オリンピック、お疲れ様でした。本当に大変でしたよね。でも、大成功だったと思います。コロナ禍の中で、これだけできるのは、ラモスさんも言っていましたけど、日本しかできませんでした。私は、海外にたくさんの友人がいます。イタリア、フランス、イギリス、アメリカの皆さんが、パラスポーツのテレビ中継を見て「ありがとう」と本当に喜んでくれた。僕に言われても困るのですが、「ありがとう」と、言われました。

その中で、これから一体どうしたらいいか、すごく大きな課題だと思うんです。これからまた次のパラリンピックまだあるんですが、どうしても忘れがちです。当たり前ですよ、次に面白いこととか、いろんなスポーツもある。じゃあどうしたらいいかっていうとで、私は知事に、もう少しお願いしたいなと思うことがありまして、スポーツもそうなんですけども、パラスポーツをする選手の人柄が知りたいんです。

ですから、僕は根木さんとすごく親しくさせていただいたんですけども、結構、適当な男なんです。だから僕は彼が大好きです。やっぱりパラスポーツする人も、「いやあ、俺、女の子にもてたいんだよな」とか、結構そういう普通のぶっちゃけトークをするので、そういう部分を出してあげると、さらに「いいじゃないか、もっと何か親しみあるな」っていう感じで応援していくと思うんです。多分、プロ野球の日ハムの新庄、ビッグボス、彼が話題になっているっていうのは、本当にやっぱりぶっちゃけトークで普通に面白い、何やるかわからない、ああいう目立ちたがり屋の人はね、パラスポーツをやっている人、ほとんどです。実はこれはものすごく大切に、誰かに見られているとかなんかちょっといいわねっていう感じの方が、本当にその人のパワーにもなるし、僕らも知りたくなる。

またもう一つ。パラリンピックに出られない人だって当然います。別に、パラリンピックなんか出なくていいんです。出られる人はわずかです。でもそこで、認知してもらうことが、僕はもう一つ大切なことだと思います。

障害者の方で同じ境遇にいる人が、僕らは、今度、近くにいた時に、支え合ってあげられる。例えば、道を歩いている、向こうから車いすの人が、前から来る、障害者の方、そして車いすの方が来たら、まだまだ日本は、目をそらすことも多いんです。目をそらすっていうのは、失礼な意味じゃなくて、優しさから見ているのは失礼だと思うんで、目をそらしてしまうんです。だからそういう意味で、目を逸らされるのってどんな気持ちなのかって聞いてもいいんです。そういうような話し合いをすると「なんだ、そんなこと考えていたんだ」とわかる。

だから、あんまり僕は「感動」とかっていうのをパラスポーツの人に背負わせたくないんです。それすごくそれを背負っているというのは、もし僕だったら、厄介でしょうがないんです。もう、やだな、これからまた3年間はいいい人でいなくちゃいけないのかって、これまた厄介なんで、普通の形で接してあげたいと思うので、ぜひ、パラスポーツ界の新庄が出てくるといいですね。

【小池知事】

そうですね、もう、パラスポーツの新庄、そうですね。三浦さんなんか、なれるんじゃない？

さて、それではですね、リモートでも、もう今日たくさんご参加いただいております、本当ありがとうございます。猪狩さん、よく会場来てくださいましたね。ありがとうございます。猪狩さん繋がっているかな、お願いします。

【猪狩 ともか様】

はい、ありがとうございます。仮面女子の猪狩ともかです。

私は、大会期間中は、中継番組に出させていただいたりしていたんですけども、大会期間中、本当にたくさんの盛り上がりを感じていまして、それと同時に、これは、この期間中だけで終わってしまうのかな、一過性のもので終わってしまうのかな、といった、ちょっと不安な気持ちとかもあったりしました。

でもそれが先日、BEYOND STADIUMというパラスポーツイベントが開催されました、私も仮面女子メンバーとして参加させていただいたんですけど、そういった、大会が終わっても、まだパラスポーツを盛り上げていく、魅力を伝えていくイベントがあるということは、本当に素晴らしいことだなと思いましたし、これからは私はそういったイベントにどんどん参加していきたいなと思いました。

そのイベントでボッチャ大会があったのですが、その仮面女子のメンバーたちも、みんなボッチャ大会に参加していまして、感想を聞いたらもう本当に楽しい、こんなスポーツあったのを知らなかった、というふうに喜んで言ってくれました。それと、他にも普段なかなか関わらないような人たちと一緒にスポーツをすることができて、すごくいい機会になったっていうふうに言っていたんです。

人間は、知らないモノに対してすごく距離を置いてしまうと思うんです。今も、その障害のある人とかに対して、どういうことに困っているのかとか、どういう特徴があるのかということを知らないから、ちょっと距離を置いてしまう部分があるのかなというふうに、私は思っていて、なので、いろんな特徴のある方たちと交流できる機会がいろいろなところであつたら、共生社会といったものに近づいていくんじゃないのかなっていうふうに私は思いました。これからはパラスポーツに関連したイベントだったり、メディアが盛り上げてくださるとか、そういうことが続いていったら嬉しいなというふうに思いました。以上です。

【小池知事】

ありがとうございます。またいろんな大会のとき声かけますね。

続いてリモートでご参加いただいている二條さん、リオ大会、車いすテニスで活躍されました。それから、前、海老蔵さん一緒にずっと街の段差を見て歩いたときに、ご一緒だった方です。二條さんお願いします。

【二條 実穂様】

はい、二條実穂です。私は、今ご紹介いただきました通り、リオのときは選手として参加させていただいていました。今回は聖火リレーですとか、こうしたパラ応援大使の活動をさせていただき、大会期間中は競技会場で毎日、テレビ放送に向けた解説をさせていただいておりました。

こういった活動の中から、選手の時には感じられなかったことを、今、これだけたくさんの方々が支えてくださって、大会が成り立っているということを、改めて

感じることができました。

先ほど知事からもお話ありました通り、海老蔵さんや高橋さんと共に、有楽町の駅を視察に伺った際や、自分自身の生活の中でも、ハード面のバリアフリーというのは、この東京大会に向けて、とても進んだなということを実感しています。

そんな中行われたパラリンピックで、選手の皆さんの活躍する姿を見て、興味関心を持ち、パラスポーツを実際に見てみたい、挑戦してみたいという声を耳にする機会が大変増えました。

元アスリートとして、その気持ちに応える場を維持していき、障害の有無に関係なく、そして障害の程度にも関係なく皆さんが楽しめるスポーツとして、パラスポーツがこれからも発展していったほしいなと思っております。

【小池知事】

はい、ありがとうございます。

さて、次はですね、パラ応援大使はいろんな分野の方にご参加いただいて、この東京の魅力の一つは食ですね。ということで料理人として何人か、もう超有名なお店の方々ばかりです。「醍醐」の野村さん、今日はリモートで参加していただいています。よろしくをお願いします。

【野村 祐介様】

はい、よろしくお願いいいたします。パラリンピックのイベントを通しまして、初めて競技を目の当たりにさせていただいて、また一緒に競技をさせていただきました、アスリートの方々の本当に驚異的なブラインドサッカーですとか、我々にはとてもできないような五感の鋭さですとか、身体能力というのを見せつけていただきました、本当に衝撃を受けました。

そして、また競技の例えば馬術の宮地さんですとか三浦さんのように、『ありがとう』という5文字で、ここまで人を感動させられるのかってというのは、普段の仕事を通じてものすごいことだなということを、まじまじと痛感いたしました。

応援大使をさせていただいて、何かをしてあげようというわけではないのですが、そういう気持ちで始まったものが、多くのものにありがとうとおっしゃっていましたが、こちらがありがとうという気持ちにさせていただいたのは、印象的でした。

皆さんもおっしゃっていた通り、ボッチャという言葉が今この会場ですごく多く聞かれたと思いますが、私も恥ずかしながら、このボッチャという競技を存じ上げておりませんでした。この大会を通じて、または故こん平師匠ですとか、知事、テリーさんですとか、星さんと一緒にボッチャをさせていただいて、ものすごく楽しかったです。これだけ、いろいろな年齢または、性別、立場の方々が一つになって楽しめるようなコンテンツというものがあつたのかということはずごく驚きでした。

こういうボッチャのような競技であれば、限られたリソースで多くのところで施設として、整備していくこともできると思いますし、いわゆる地域のゲートボールみたいな感じで、多くのどんな方でも一緒に楽しめる施設を増やして行って、施設・精神両面で持続的に生活に取り入れられるようになる、ということを目指していきたいなというふうに思いました。

【小池知事】

ありがとうございます。野村さんでした。

それから同じくリモートで参加していただいている、大使でいらっしゃるアブディンさん。アブディンさんはもともとスーダンのご出身で、でも声だけ聞いていると、もう日本語むっちゃくちゃ上手いんですね。アブディンさんどうですか、今回のパラリンピック。

【モハメド・オマル・アブディン様】

どうもありがとうございます。まず、大会は無事に開催されたことを非常に嬉しく思いますし、それに携わった全ての方々に感謝したいなと思います。私は、東京パラ大会を、東京で終わらせてはいけないと思っていて、東京都のレガシーとして、世界中の障害者の問題を解決する取っ掛かりにさせていただけたらいいなと思います。

というのも、世界の障害者の80%以上は、開発途上国にいるといわれています。彼ら彼女らは教育の面とか、就労の面とか、余暇の面とか、いろんな面で非常に大変な状況に置かれていますのは現状です。

「パラスポーツ×国際協力」ということで、東京パラのレガシーとしてなにかできるんじゃないかとおもいます。それをたたき台に、ぜひ検討していただけたらいいなと思います。

また、東京の方々をはじめ、日本中の皆さんが今回、障害者スポーツを間近にしたことによって、障害への理解は非常に格段に、広がったのではないかと思います。それと同じように、開発途上国において、パラスポーツをフックに、障害者がより生活しやすい社会とか世界を作っていけるように個人的に仕掛けたいなとおもいます。

それにぜひ賛同する方々でお話できたらいいなと思います。以上です。お疲れ様でした。

【小池知事】

ありがとうございます。スーダンご出身で、目が不自由でいらっしゃるにもかかわらず、本当に滑らかな日本語、素晴らしい活躍していただいています。

さあ、あとお二方伺いますね。それぞれ葭原さんはバルセロナとアトランタは陸上で、それからシドニーとアテネは自転車ということで、もう本当に大活躍され

て、その上で今回の東京パラリンピックご覧になっていかがでございましたでしょうか。

【葭原 滋男様】

パラ応援大使の葭原滋男と申します。今回の東京パラリンピック、大成功だったなと思っています。やっぱり、いろいろ話にも出てきていますけど、ハード面は、日本は、世界一だと思うんです。でも、それだけでは完璧にすることは難しいだろう、と思います。それを補うことができるのが、ソフト面じゃないかなと思います。

街に出ることについて、恐怖心や不安感を持って引きこもってしまっている障害者も結構いるんじゃないかなと思っています。私も、こうやってアクティブに行動している方ではありますけど、日常的にやっぱり不安感を常に持っているなど実感しています。その辺を補えるのは、周りの人たちのサポートや声かけではないかなと思います。周りで、障害者を見かけたときに、例えば、「こんにちは」とか声をかけることによって関心を持つ、そういうことをやっていくことは、必要ではないかなあと1つ提案させていただきます。

もう1つは、パラスポーツは、パラリンピックの競技だけではなく、いろんなところで活動していると思います。そういうクラブ活動とかサークル活動、そういうのを積極的に推進していくことが必要だと思います。

私は、今現在ブラインドサッカーのチームで活動しているのですが、その中には、ブラインドサッカーに興味を持ったという人たちはもちろんですけど、「サッカー大好きだよ」という人もいるし、「サッカーちょっと、できないよ」、「スポーツ苦手なんだけど何か関わりたい」、そんな方たちも、集まってくれています。そういう中で、障害の有り無し関係なく、自分に何ができるのかなあということを、いろいろ考えながら、みんなで活動していく。みんなが、当たり前前に混じり合っていきいきと共生する社会、そんなのが出来上がっていくのかなとそんなふうに考えています。以上です。

【小池知事】

ありがとうございます。

最後の上原さん、上原さんは2006年のトリノ大会、10年のバンクーバー、こちらは銀メダル。そして平昌18年、アイスホッケーで活躍されました。実は昨日も会ってたんですね。今日2日目、引き続き。

(上原氏「一緒でしたね。日曜日も一緒でしたね」)

そうなんですよ。1週間に3日会っているってどんなことやと思いますけれども、よろしくお願いします。

【上原 大祐様】

上原と申します。よろしくお願ひします。さっき、あの映像に出ていた由依ちゃんと私、一緒に開会式にでていたんです。何やったかっていうと、ダブルダッチというのをやっていて、私、車椅子で縄跳び飛んだりしているんですけども、そのチームメンバーなんです。

今回のパラは、We the fifteen といつて15%は世界で障害を持つてる人がいるんだよといったメッセージでパラリンピックが開かれていたんですけども、開会式では、パフォーマーたちが目が見えない人もいれば、聴覚の人もいれば、車いすの人もいれば、ちょっと寝たきりの人もいればということで、いろんな障害を持った人たちが集まっていました。ダブルダッチですので、チームで出ていたんですけども、うちのチームメンバーは、みんな健常者なんですけれども、彼らがね、手話を覚え始めたりだとか、あとは車いすのサポートの仕方を覚え始めたりとかして、この開会式のパフォーマーたちが、まさに世界の共生社会のもう本当に見本だなつていうふうに感じて、ああいうような空間をどうつくってあげればいいのかつてころが、何か1つ今後の展望じゃないかなと思つています。

共生社会つて結構、みなさん言ひますけれど、私は共生社会つて、共有社会から始まると思つていて、場所だとか時間だとか目的だとかいろんなものを共有するから生まれることだと。だから今回の開会式つていうのはもう成功させるぞ、いいパフォーマンスするぞという、そういう共有があつたことによつて、みんなが共生社会になつたんじゃないかなつていうふうに思つたので、何かそこら辺をみなさんと一緒に作つてあげればいいんじゃないかなと思ひました。

あとサポートしている企業のみなさんたちが、今だに「何でサポートしたんだよ」みたいなところで、言われたりしているケースもあるので、ぜひこれが、「何でサポートしたんだよ」じゃなくて、「サポートしてくれてありがとう」という未来を我々が作つてあげればいいんじゃないかなと思つています。レガシーとしてはそういうつたところで共有社会、共生社会どうやって作つていくかをみなさんと一緒にアイデアを出していきながら作つていくこと。

あとは、障害を持つているから、スポーツ施設貸さないよつてところが沢山あるので、そのスポーツ施設をどう借りられるようにしていきかつていうのが我々の1つのミッションだと思ひますし、あとはオリパラ教育、ぜひ、ロンドンとかはずつと教育を続けていることによつて、いまだにパラスポーツが人気あつたりするつてとこで言うと、この教育の部分を、どう継続させていくか、小学校、中学校、高校に継続させていくところが、レガシーになるんじゃないかなと思つております。以上です。

【小池知事】

ありがとうございます。

そしてトリのトリはですね。私、カラオケの十八番はですね、実は「なごり雪」

なんです。イルカさん、お待たせしてすいません。私、イルカさんに「なごり雪」の伴奏をしてもらって、2000人ぐらいのところで歌ったのはもう、あれはもう絶対忘れられないですよ。ありがとうございます。

(イルカ氏「そうですね。ありがとうございます。」)

今回のオリンピック・パラリンピック、無観客ではありましたが、ウェブを通じてですね、30億人が、そして、またそれぞれの競技がYouTubeなどに上がっていて、アクセス数が、なんと280億回だということなんです。ですから、会場には残念ながら観客のみなさんいらっしゃらなかったけど、世界中で、この東京オリンピック・パラリンピックが見られたということです。特にこのパラリンピックを見て、日本の子供たちも「すごい」という声があちこちから聞こえました。そういったレガシーをしっかりとつないでいかなければと思っています。イルカさん一言お願いいたします。

【イルカ様】

ありがとうございます。今回は連日、映像を通してみなさんの姿という形になりましたけれども、より克明に、皆さんのことを知ることができたということは非常に大きかったと思います。

それはやはり、人間のその身体能力の可能性ということ、要するに映像というものの通して可視化できたということです。より近く、特別なものではないという感覚が、多分、皆さんの中に、私は確実に生まれたと思っています。

私の個人的な話ですが、私の叔父が、ずいぶん若い頃に怪我をして片足を失いました。スポーツ選手を目指していた叔父なんですけれども、もうずいぶん何十年も昔でしたから、諦めなくてはいけなかったんですね。私は幼いながらその叔父を見ていて心が痛くて、悲しい思いをしたという思いがずっとございました。今回パラリンピックを拝見して、叔父がまだ今の世の中に生きていて、その時代だったら、諦めずに夢を叶えることができたんじゃないかと思うと、非常に残念な気持ちと、それから、そこにある未来に対する希望というものが、もてるんだという世の中になっていく。もっともっとそして良い世の中になっていくということを感じていかれる、まさに、多様性を持っていかれる世の中になれたんじゃないかなということを、決して特別な世界ではなく、私達同じ世界に生きているということ、共有できたことが、何よりも今回、非常に私たちにとって大きな大きな、宝物をいただいたと思っておりますので、この火を消さずに、何とかずっとずっと、バリアフリーの形に、私、今も介護生活をしておりまして、車いすを押しておりますけれども、そういう現実的な意味も込めて皆様とご一緒に何かこれからもさせていただけたらと思っております。皆様、素晴らしい感動をありがとうございました。

小池知事もお体大切になさってください。

【小池知事】

ありがとうございます。イルカさんがもうまとめてくださって。ありがとうございます。

そしてパラ応援大使の皆さん、これからも、様々な視点からのご意見を頂戴すると同時に、パラスポーツの魅力、バリアフリーの推進、バリフリって言っているんですけども、バリアフリーの推進について、広く都民の皆さんにも発信していただければと、このように思います。あらゆる面でバリアを取り除かれた段差のない、そういう社会を作り上げていきたいとしたいと思います。

2020パラリンピック大会は終わりましたが、パラスポーツはますますこれからです。早速「チャレスポ！TOKYO」っていうのを次の日曜日、10時から、東京国際フォーラムでやってます。上原さん、またここで会うんだ。1週間に3回って。

(上原氏「すいません。」)

すいませんって、謝ることないんですよ。ありがとうございます。それから、パラスポーツは年齢も障害の有無も関係ない、誰もが楽しむことができるものですから、東京都は、多様性、包摂性にあふれる都市にするためにも、このパラスポーツを通じて、そんなまち作りをしていきたい、人作り、心作りをしていきたいと考えています。

今日は本当にみなさんお忙しいところお集まりいただきまして、誠にありがとうございます。また、しばしばお声掛けるかと思えますけれども、ご協力のほど、よろしく願いを申し上げます。来年のカレンダーもございますので、お土産にお持ち帰りいただければと思います。

本当、みなさん、ありがとうございました。Thank you very much.

【横山次長】

本日はご出席をいただきましてありがとうございました。以上をもちまして、第1回「パラスポーツの振興とバリアフリー推進に向けた懇談会」を終了させていただきます。

※議事録については、読みやすさを考慮し、重複した言葉づかい、明らかな言い直しなどの整理や補足説明をしています。